

天文同好会サミット

渡部 潤一

〈国立天文台天文情報センター

〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1〉

e-mail: jun.watanabe@nao.ac.jp



2008年12月6日・7日、国立天文台三鷹に全国のアマチュア天文家が集結した。「世界天文年イベント 天文同好会サミット」である。

日本での世界天文年の種々の企画は、プラネタリウムや科学館、公開天文台などの施設や、各学会・天文教育普及研究会などの団体間で有機的に連携をとりながら、順調に準備が進んできた。しかし、その過程で、これらの連携からぼっかりと抜け落ちていたのが、天文同好会をはじめとするアマチュア天文家層であった。一方、企画委員会の主催で「めざせ1,000万人！みんなで星を見よう！」という、やや無謀とも思える企画も検討されていた。1,000万人という数字に対しては、親委員会の日本委員会でも、その実現に疑問が呈されるなどの問題もあった。そこでアマチュア天文家の方々も世界天文年と一緒に盛り上げていただき、各地で観望会や星祭りを独自に開催している同好会に協力を得ながら、できれば1,000万人を目指そうと考え、天文雑誌の協力も得て、今回の天文同好会サミットの実現となったわけである。

その結果は、一言で言えば大成功であった。古典的な天文同好会から、施設のボランティアの会、あるいは国立天文台と三鷹市が行ってきた「アストロノミーパブ」をきっかけに発足したグループなど、さまざまな60団体、実に160名余の参加があり、主催者側はうれしい悲鳴をあげた。初日はシンポジウム形式で、世界天文年2009の全体紹介、そして日本委員会の企画の紹介を海部委員長、渡部企画委員長が行った。つづいて、特に一般向け観望会を中心とした同好会の活動紹介



観望会の開催事例に熱心に耳を傾ける参加者。



「天文同好会の現状」と題したディスカッションの司会は筆者が務めた。

として、4グループ（NPO法人熊本県民天文台、仙台のボランティアうちゅうせん、川崎天文同好会、福島天文同好会）の事例紹介があった。それぞれ曇天時の工夫や、独自のポリシーがにじみ出ていて、興味深かった。他の同好会にも、それぞれの活動をポスターで紹介してもらった。27件のポスターや同好会誌がたくさん並んだだけでなく、歴史的な望遠鏡の実物展示もあり、大賑わい



会場では同好会誌の展示も開催。活動レベルの高さが伺われる。

であった。

その後、事前のアンケートの集計結果を基に、天文同好会の現状や、それぞれが共通に抱える問

題点について議論を行った。同好会の高齢化や、会員数の凋落傾向などの共通の問題点や、観望会を行ううえでの保険のかけ方など、思いがけない情報が披露されたのは有意義であった。夜は懇談会で、社会教育用公開望遠鏡 50 cm の観望会を地域ごとに順番に行う間、次から次へとマイクを握る人が絶えないという、楽しいサミットとなった。翌日も、晴天に恵まれ、初日に参加しなかった人たちも交え、120人近い人が朝からやってきた。四つの班に分かれて、常時公開コース、4次元デジタル宇宙シアターなどの見学を行った。

これまで国立天文台に天文同好会が集うようなことはなかった。また、こういった全国規模での同好会同士の交流の場も、これまではありそうではなかったのは事実である。同好会運営や観望会開催のノウハウ交換を含め、相互の交流を深める意味も大きかったようである。「世界天文年を契機に全国の天文同好会を横糸で結ぶ連絡網をつくろう」という結論が出たのは大きな成果である。